

戦後65年を前にあかされた元捕虜の苦悩
SBSスペシャル
日本兵サカイタイゾーの真実
～写真の裏に残した言葉～



海兵隊戦争記念碑 バージニア州アーリントン 岸本 達也
(静岡放送 報道局情報センター)

みんなで語ろう民放史
題字 中川順

今回の『民放史』は硫黄島で
自らの意思で敵に投降した兵士
の苦悩を描いた『現場からの發
言』です。

放送は2009年5月4日。

菊村到の芥川賞作品『硫黄島』
は、捕虜になつた兵士が、玉碎
の島に帰つて自ら命を絶つ。戰
場の心の傷に押し潰される姿を
描いた名作です。

この作品も同じく捕虜の姿を
描いており、ギャラクシー賞の
選評にあるように、サカイタイ
ゾーの『戦争が終わることを望
んだが故の苦悩が、くつきりと
浮き出て』いる力作です。

『みんなで語ろう民放史』は三
号連続で地方の『現場からの發
言』でした。ダム、沖縄、硫黄
島と、いずれも時宜を得た発言
であると同時に、財政的に苦し
い地方局が、苦しさを撥ね退け
て頑張る意欲を知つて頂きたい
と思います。

月、小雨交じりの高速道路を静岡
から東へ向け走つてた。この日
は、富士山の麓にある靈園で坂本
泰三さんの二十三回忌が営まれる
車窓に流れ行く風景を手繰り寄せ
るかのように、私はこれまでのこ
とを振り返つていた。
写真は遺族の元へ戻つて、本当
に良かったのだろうか。
気持ちはなお、揺れていた。

硫黄島で託された写真
これは映画ではない

それは2006年10月、静岡市
在住の男性から、ある写真を見せ
てもらったことに始まる。男性は
同じ年の春、カナダのスキーツア
ーに参加。その際、偶然居合わせ
たカリフォルニア州在住の弁護士、
ステイーブ・ロバルドさんから写
真のコピーや受け取つた。「父の遺
志を受け継ぎ、写真を日本兵に返
したい」。ステイーブさんはそう繰
り返し、日本兵搜索への協力を求
めてきたという。写真は、いまか
ら65年前、硫黄島で日本兵がアメ

プロローグ

リカ兵に託したものであつた。

太平洋戦争末期、最大の激戦地

となつた硫黄島。1945年2月

19日、アメリカ軍が上陸。36日

間にわたる日米の攻防戦は、両軍

合わせて約2万7千人という、お

びただしい数の戦死者を出した。

戦いが始まってからちょうど1

ヶ月、戦闘の最中、一人の日本兵

がアメリカ軍に投降した。そのと

き、この兵の尋問に当たつたのが、

当時、海兵隊の中尉として戦つた

ステイーブさんの父親だつた。捕

虜は自らを「サカイタイイゾー」と

名乗つた。



託されたサカイタイイゾーの写真

暗く狭い塹壕の中で約三時間、二人は尋問官と捕虜という間柄ではあつたものの、互いに話せたフ

ほどなくして、サカイ氏の行方

を捜す取材が始まつた。が、手

とも20人ともいわれている。それでも何とかして生還者を捜し当てたものの、皆、写真に収まる人物

二万人の中の一人を探す



硫黄島の戦い
(1945年2月19日-3月26日)

存命する生還者は、いまや10人

に見覚えはないという。サカイ氏の写真にまつわる話をしても、まるでかみ合わない。

日本兵サカイタイイゾーの真実

2008年9月、厚生労働省から一通の手紙が届いた。それは、

事態は突然、大きく動き出した。

ランス語で会話を重ねるうちに親交を深めていったという。そして、サカイ氏は下着の中から写真を取り出し、こう持ちかけた。「これは私に残された一番大切なものです。いずれは没収されてしまうでしょうから、私としてはあなたに預かっていてもらいたい」。

「まるで映画のような話でしよう」、男性が興奮気味に話を続けている。折しも、この年の冬、クリント・イーストウッド監督による硫黄島二部作の公開が控えていた。戦場に咲いた一輪の花ということか。耳を傾けながらも、私はどうも釈然としない。そんな美しいストーリーが、本当にありえるのだろうか。美談の裏に潜む「何か」があるようなら、そこは映画館ではない。本物の殺し合いが行われた絶望的な戦場であり、「玉砕の島」として戦史にその名を刻む硫黄島だからである。

真のみ。昨今の放送業界、とりわけ地方局を取り巻く厳しい経営環境の只中にあっては、当てのない取材がそう簡単に認められる筈もなかつた。たつたひとり、休日を利用して東京の防衛研究所で史料を読み漁つたり、軍関係の名簿から硫黄島生還者を捜し出すなどの個人取材を続けた。

しかし、それは困難を極めた。硫黄島で戦つた2万人の日本兵のうち、奇跡的に生き残つた兵士はわずかに1000人。60余年の歳月が、さらに追い討をかけ、すでにその大半は亡くなつていて。

それでも拾おうものなら、即座に手榴弾の餌食になりました。「最後は海水にガソリンを混ぜて、壕の中に流し込んでくるわけですよ。水がないというのを知つていて、罠を仕掛けるわけです。うつかり缶詰でも拾おうものなら、即座に手榴弾の餌食になりました」。

海水にガソリンを混ぜて、壕の中に流し込んでくるわけですよ。水だ!と思つたら、火炎放射器で一気にやられてしまつて。生還者の語る戦場に、思わず言葉を失つた。その憎悪に満ちた渴き切つた大地に、美しい花など咲くはずもなかつた。やはり、美談とは程遠い。

2年間に及ぶ生還者への聞き取りから、そんな思いを強くしていた頃だった。

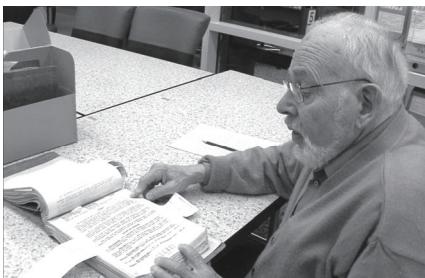
サカイ氏の遺族を特定したことを伝える通知だった。実は、その5ヵ月前、当局に遺留品の調査を依頼していたのだった。何の手掛かりも得られぬまま過ぎて去つていった2年間、その存在がぐつと近づいたように思えた。が、その書面に思わず目を疑つた。「写真の所有者・坂本泰三」とある。何かの間違いではと思い、当局に確認したが、やはり「坂本」だつた。「サカイ」は実在しない。偽名であった。

やはり「何か」あると思つていた。美しいだけでは済まされない「何か」が。それからまもなくして、坂本泰三さんの遺族に会つた。「なぜ、父は『サカイ』と名乗つたのでしょうかね」。父親は、自らの戦地での『出来事』について語ることはなかつたという。坂本泰三さんは戦場でなにを考え、どのように行動したのか。そして、アメリカ側の尋問に対し、なぜ、「サカイ」という偽名を貫き通したのか。そこにある日本兵サカイタイマーの真実とは。

時を同じくして、アメリカ国立公文書館でサカイ氏の尋問調書が確認されたと、現地から連絡が入

った。そして、上司から思いがけない提案があつた。「アメリカに行つてくるか」経営はますます厳しさを増していく。社の英断であつた。

ワシントンD.C.から車で約1時間、郊外の町を走り抜け、アメリカ国立公文書館に到着した。第二次世界大戦中、対日戦を有利に展開するため、徹底的に情報を収集したアメリカ軍。ここには膨大な数の日本兵捕虜に関する資料が保管されている。



サカイ氏の尋問調書
アメリカ国立公文書館にて

調査を依頼した公文書館リサーチャー、ダン・グロスさんは、お読み上げた。「名前・サカイタイ

ゾー／性別・男／身長・5フィート4インチ（約160センチ）／体重・60キロ／目の色・茶色／頭髪・黒／年齢・28歳／階級・伍長／部隊・第109師団司令部通信隊」。それは、日本兵サカイタイゾーの尋問調書だった。さらに、そこにはサカイ氏が硫黄島総指揮官・栗林忠道陸軍中将の通信担当員であつたことも記されていた。サカイ氏は栗林中将の指揮を暗号化し、送信する任務に当たつていたという。

グロスさんは続けた。「サカイ氏は暗号や伝令の内容を知つていません。だからアメリカ軍の情報局は、彼から有益な情報が得られると判断したのです」。栗林中将の傍らで様々な情報を知りうる立場にいたサカイ氏。調書には日本軍の組織、軍備、そして暗号に至るまで事細かに記されていた。サカイ氏は軍の機密を、アメリカ軍に提供していた。

調書には、「この捕虜が我々に対する協力的であるのは、東京で受けた外国語教育の影響が大きい」と記されている。サカイ氏は、戦前、フランス人によって設立された東京・御茶ノ水にあるアテネ・フランセで学んでいた。同校の松本校長はサカイ氏の2年後輩で、開戦時は「アメリカと戦争するには間違つた。この戦争を早く終わらせなければいけない」と考えていましたと



サカイ氏を尋問した元アメリカ海兵隊員

60年前、硫黄島でサカイ氏を尋問した元アメリカ海兵隊の言語士官、リチャード・ホワイトさんはこう振り返る。ホワイトさんはいまでもサカイ氏のことを鮮明に記憶していた。「彼は日本が負けることを確信していました。負けるのだから、もう戦闘をやめるべきだとも。洞窟から出てきてバンザイ突撃をする日本兵を彼は狂信的

に思つていました。仲間に對しが同情はしていたものの、やはり

「それは間違っていると考えていまし
た」。

尋問に際し、サカイ氏はアメリカ軍に協力する道を選んだ。やがて彼はワシントンD.C.にほど近い《秘密捕虜収容所》に移送される。ここで捕虜が明かした情報はペントAGONに直結するという。アメリカにとつて戦略的に最も重要な捕虜収容所だった。

写真の裏に残した言葉

2008年12月、アメリカ兵の遺族、ステイーブさんが来日した。写真は63年ぶりに再び祖国の地を踏み、横浜市に住む遺族に返還された。ステイーブさんから、戦場で写真が託された経緯、そしてこの日までそれを大切に保管してきたことなどが伝えられ、遺族もその美談に感激した。が、やはり、「サカイ」に戸惑っていた。遺族に「サカイ」のことを告げるべきであろうか。しかし、実の父親が口にしなかつたことを、どうして一取材者にすぎない私が告げられようか。平穀な暮らしを送る遺族に辛い思いをさせる権利など、私には全くない。のままそとし

の便りを頂いた。」これはフランスの詩人、ボーデレールの『悪の華』の一節ではないか。すぐに図書館へと駆け込み、『悪の華』の頁を繰つた。そして、"Sois Sage, ô malheureux" で始まる一節を見つけた。

画家を夢見て、フランス語を学んでいたという。しかし、戦後、本格的に絵を描くことはなかつた。祖国を、戦友を裏切つたことへの「苦悩」だつたのであらうか。そう、確かに、玉碎の島の生存者の一人は彼を「國賊」と断罪する。アメリカ軍に投降した理由について、サカイ氏は調書に次のように述べている。「勝てない戦争のさらなる惨害から間違つて教え込まれた日本の一般国民を救いたい」と。サカイ氏はこの戦争を一日でも早く終わらせるため、アメリカ軍に投降するという道を選んだ。が一、その時すでに新たな苦しみが自らに忍び寄つてくるのを覚悟していたのであらうか。アメ

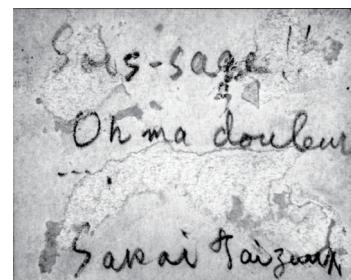
坂本泰三さんに捧ぐ

富士山の麓にある靈園に着いたのは、ちょうど昼前だった。もうすっかり雨もやみ、少し晴れ間が覗いている。坂本さんの墓前には、花が供えられ、まわりを子や孫たちが囲んでいる。

もしあの時、「サカイ」として生き残ることがなれば、ここにいるほとんどの人は、いま存在していないだろう。坂本泰三さんは、死よりも苦しい戦後を生きたのかかもしれない。しかし、自らの「苦

2カ月後、またしても新たな真実が明らかになった。2009年2月、TBS『報道特集NEXT』で、写真が返還されるまでの経緯をまとめた。その中で、サカイ氏がステイプさん(の父親)に写真を託す際、裏に書き残したある言葉について触れた。

“Sois Sage, ô ma Douleur”。放送後、フランス文学に造詣の深い視聴者数名から、同じような内容



写真の裏面に残した言葉

リカ側の尋問に対し、「サカイ」という別人に成り済ますことで、あるいは、自らの「苦悩」を覆い隠そうとしたのかもしれない——「わが「苦悩」よ、ききわけて、静かなれ」。

「悩み」と引き換えていくつかの命を繋いだ。いま、その命ひとつひとつが、父親の「眞実」を受け止め、「苦悩」を包み込もうとしている。子どもたちは交々と口にする。「良心の呵責みたいなものがあるのでは」「亡くなるまでずっと背負い続けたにちがいない」「辛い人生だった」と。



硫黄島で託された写真は63年ぶりに遺族の元へ返された

としたドキュメンタリー番組を数多く手掛け、現在はノンフィクション作家として活躍する中田整一さんであった。用件は「サカイタイゾーについて」であった。後日、東京でお会いし詳細を訪ねると、中田さんは日本兵捕虜密尋問所について調べを進めていたということであった。その著書『トレイシー』は今年4月に上梓され、このたび第32回講談社ノンフィクション賞を受賞された。サカイタイゾーは「第七章 硫黄島の秘密」に登場する。

写真は、やはり遺族の元へ戻つて良かったのだと思う。
エピローグ

昨年10月、私のところへある1本の電話が入った。相手は元NHKプロデューサーで現代史を中心

(編集委員会注)

「資料提供 静岡放送」



コースレコード賞の目録を渡す
(写真提供 小樽CC)



ジャズ・コーラス ユニットのライブ

の電話が入った。相手は元NHKプロデューサーで現代史を中心

会員だより



☆北海道地区
伊東 英輔 (HBC)

実はいま、私もサカイタイゾーについての取材記を執筆している。中田さんとそのご友人である作家、辺見じゅんさんに薦められてのことです。刊行は来年の夏の予定です。

先日のサン・クロレラ・クリニックでは、テレビ中継の手伝いの下働きで観戦する暇もなかつたが予選60位でやっと予選通過した石川遼君が、決勝ラウンド一日目、国内最長の7471ヤード・パー

72の小樽CCでコースレコード63を達成した。9ホール・バーディのスコアカードを受け取りスコアチャートに立会い、妙に緊張し数字を見て感激した一日だった。

山崎甲子男 (STV)

高校卒業50周年の同期会の玉が、ハワイアンバンドの生演奏だった。メンバー全員が同窓で、平均年齢70歳、旧友130人が青春時代の音楽を楽しんでくれた。合唱では、今年11月に宮崎で開かれる全日本男声合唱フェスタに、北海道代表の一員として参加する。ジャズでは40代の音楽仲間とユニ